

エッセイ — 【特集】「継承語教育」を問い直す

継承語への私の思い

子どもとの出会いから

劉 碩*

© 2021. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. 継承語は要らない？

飛行機は福岡空港に着陸した。

2018年、私は初めて日本の土を踏んだ。晩秋の季節には少し涼しさを感じ、空気に海の匂いが混ざっていた。

住む予定の場所に着くと、荷物を床に置き、ベッドに横になった。壁の掛け時計を見て、気が付いたら、もう夜の8時だった。「何か食べに行こう」と私は独り言を言ってから、マンションを出た。周りのすべてが私にとっては、知らない世界だった。通りの角には小さな中華料理店があり、その赤い看板が特に目立った。私は近づいてドアに近づき、店の中を見てみた。「せっかく日本に来たので、和食を食べに行ったらいい」と私は思いながら去っていた。しかし、私は行く当てもなく、何回かぶらぶら歩き回ってまたこの店の前に来た。入ってみると、直ちに豆板醤の匂いを嗅いだ。

「何名様ですか」と店主のように見える人は私に訊いた。

「一人で」と私は言った。

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科 (Eメール: ryu-seki@fuji.waseda.jp)

「はい、どうぞ」

私は角にあるテーブルを選んで座った。店のテレビが漫才を放送していたが、店内はとてものさくて、音声が聞こえなかった。

「ご注文、いかがでしょうか」と店主は言った。

「餃子をお願いします。日本の餃子を味わいたいですね」と私は言った。

「日本人じゃないんですか」と店主は驚いたように言った。

「いいえ、中国人です」と私は言った。

「ハハハ、私も」と店主は急に笑って話しを続けた。「日本語がとても上手だね。何年間日本にいるの」

「ありがとうございます。今日来たばかりなんですけど」と私は言った。

「本当に？」店主はまた驚いたようだった。

「ちょっと待って、今作っていくね」と言ってから、厨房に入った。

厨房から流れてきた中華鍋の音が私の食欲を少しそそった。テレビの音声は相変わらずはつきり聞こえなかったが、それでも私は興味津々で見っていた。

突然、急いだような足音が後ろからやってきた。振り返ると、5、6歳ぐらいの女の子が叫びながら隣を走っていた。店主は裏の厨房から出て、女の子を抱き上げ、「ももえ、静かに」と女の子を叱った。「ごめんなさい、娘だ」と店主は私を見て話した。私は微笑んで頷いた。

まもなく、餃子が出来上がった。店主は餃子のお皿を持ってテーブルに置いてから、私の向こうに座った。「おいしいね」と私に訊いた。

「美味しいです。ちなみに、奥さんは日本人ですか」

「いいえ、何か問題があるの」店主は首を横に振りながら言った。

「娘さんは『ももえ』という名前ではないですか。母親は日本人だと思うんですけど」と私は言った。

「『ももえ』はいい音ね、これだけだ。あの、ももえという美しい有名人もいるのではないかと店主は笑いながら言った。

それ以来、私はほぼ毎週その店で食事をしてきた。店主は話し好きな人で、家族のことをよく話してくれた。ももえが日本で生まれ、中国に戻ったことはないことも話してくれた。ももえは家においても日本語を話すので、彼女の中国語はあまり流暢ではなかった。ある日、私は店主に「ももえに中国語を学ばせないですか」と訊いたが、店主は「中国語は要らないよ。こ

れからも家族がずっと日本にいるだろう。日本語を上手に話せれば、十分だ」と言った。彼の話を聞いた後、「要らないか」と私はつぶやいた。

2. 継承語は要る？

2019年の旧正月、私と数人の友達が店に集まって飲み会をやった。

「チンジャオロース、ごゆっくりどうぞ」店員さんがお皿を持ってきてテーブルに置いた。

途中、私はトイレに行った。出てきたとき、テレビの前に一人で座って番組を見ているももえを見つけた。テレビは中国のアニメを放送していた。私は微笑んで彼女に向かって近づいた。

「テレビの中国語がわかるの」と私は日本語でももえに訊いた。

彼女は頷いた。

「じゃあ、中国語を話そう」

ももえは私をちらっと見てから、また頭をテレビに向けて「なぜ？」と言った。

「なぜって？ももえは中国人だからね」と私は言った。

「ももえは中国人じゃない」とももえは言った。

私は少し驚いた。

「じゃ、ももえは日本人なの」と私は話しを続けた。

「ももえは日本人でもない」

「じゃ、ももえはなにじんなのか」

ももえはしばらく黙って首を横に振った。

また何か聞いてみたかったが、後ろから「ももえ、家に帰る時間だよ」の声が聞こえた。振り返ると、一人の若い女性だった。

「こんばんは、今日の料理はいかがですか」と彼女は私を見て微笑んで言った。

「いつものように美味しいですね。え、あなたは」と私は彼女に訊いた。

「ももえの母親です」と彼女は言った。

「あ、いつもお世話になります。ちょうど今ももえと中国語を話したかったところですが、ももえは中国語を話すのをあんまり好きではないようですね」と私は言った。

「そうですね。この子は中国語をあんまり話せませんが、聞いたら理解できますね」とももえの母親は言った。

「別に要らなくても大丈夫ですね。この前、店主さんはこれからご家族がずっと日本にいる予定だと言っていたからね」と私は言った。

「要らないって、そんなことを聞くと、本当に腹立ちますね。あの人は何もわからないですよ。毎日料理しているばかりで、子どものこともぜんぜん心配してくれません。ももえは将来中国に戻って、中国の大学に行くので、中国語は要るんですよ。では、失礼します。ごゆっくり」と彼女は言ってから、ももえを連れて帰った。

私は彼女の話を考えながら、席に戻った。テーブルの上に置いた空きのグラスを凝視した。福岡に約一年間住み、2020年の春、私は東京に引っ越した。

私が住んでいる場所は神田川の沿岸である。3月は神田川の沿岸に桜が美しく咲く季節だった。住んでいるマンションは、昭和時代に建てられた小さな4階建てのものだった。その隣にはかなりおしゃれな一戸建てがあり、鮮やかな対比をなしていた。「どんな家族が住んでいるのか」と私は思いながらこの一戸建てに近づいた。門前には、名前も知らない花がいっぱいだった。不意に見上げると、窓に大きな「福」という文字が貼り付けられていることに気が付いた。「中国人なのか」と私は好奇心に駆り立てられて、手でベルに触れようと思ったが、結局やめた。その時に、お部屋の中から、親子のコミュニケーションの音が流れてきた。やはり、私の推測通り、中国人の家族だ。

「作業做完了没有」(宿題は終わったの) 母親のような人の声が聞こえた。

「やりたくない」今回子どもの声のように聞こえた。

「説中文」(中国語を話さない)

「いやだ」

3. 「継承語」とは何？

大学院に入ってから、私は日本に来たばかりの数人の子どもに日本語指導をしている。そのうち、日本で生まれ、日本で育てられた子どももいれば、海外で生まれ、幼い頃に両親と一緒に日本に来た子どももいる。学校で日本語、家庭内で母語（継承語）を話す子どももいれば、外国人と扱われたくなく、周囲の日本人のように日本で生活したいといった理由で、家庭においても母語（継承語）を使うのは嫌いと思う子どももいる。学校で少しだけ母語を話したことで、

他人から変な目で見られたことさえもあると私に話してくれた子どもがいる。もちろん、将来は母国に戻りたい、あるいは両親のことばで両親とのコミュニケーションをとりたいといった理由で、積極的に母語（継承語）を使う子どももいる。ところが、母語、あるいは継承語とはいったい何か、その問題はいつも私の頭を悩ませている。

中島（2003）は、異言語環境で言語形成期の一部を過ごす子どものことばは、「母語」と「外国語」に分けることなく、「継承語」と「現地語」という概念でくくる方がぴったり」（pp. 1-2）し、「継承語」は「主に家で使う」「父親の母語と母親の母語」（p. 2）であると述べている。「親のことば」であるため、「子どもができるのは当たり前、忘れると親も子どもも傷付くという性質を持っている」（中島，2003，p. 5）と思われる。ところが、継承語の学習は子どもにとって、本当に当たり前のことだろうか。そもそも、子どもは継承語を学ばなければならないということは誰に決定されるか、私はさっぱり分からなかった。そして、継承語を話せないと子どもが傷付くというより、むしろ、言語集団の力関係の中で、強制的に継承語を話させると、子どもにプレッシャーをかけると言ってもいい。また、継承語の学習は「要る」か「要らない」か、「親のチョイスで始まる」（中島，2003，p. 3）。ももえが継承語である中国語を学ぶか否かということも、完全にこの親のチョイスで決められると言えよう。

さらに、子どもの言語使用を見てみると、実に多種多様である。中島（1988）は、ネイティブスピーカーの言語使用を基準とし、継承語と現地語による「混ぜ語」の使用を批判し、このような混用をネガティブに捉えたうえで、「対処する効果的な矯正方法などの開発」（p. 147）が重要であると述べている。しかし、親として子どもの混ぜ語の使用を禁止せず、むしろ容認したことで、複数言語環境で成長する子どもたちは、気楽に自分ならではのことばを使用し、立派な人生を送っているケースもある（川上，2021）。一方、子どもの背景も様々であるため、単に「継承語」は主に家で使い、「現地語」は学校で学習に用いることである」（中島，2003，p. 2）という視点から、彼らの言語使用を本当に捉えられると言えるだろうか。そもそも、「継承語」と「現地語」との境界線はいったいどこにあるか、その問題をさらに深く考える必要があると私は思う。

4. おわりに

「継承語っていったい何だろう」と思ったら、ももえの顔が頭に浮かんでき、いきなり眠く

なった。私はベッドに横になったところで、また隣から親子の声が流れてきた。

「快睡覚」(寝なさい)

「いやだ」

これからも、「ももえ」たちとの出会いが続いていくと思う。

文献

川上郁雄 (2021). 『「移動する子ども」学』くろしお出版.

中島和子 (1988). 日系子女の日本語教育『日本語教育』66, 137-150.

中島和子 (2003). JHL の枠組みと課題 —— JSL/JFL とどう違うか『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』プレ創刊, 1-15.